

「わくわくサマーキャンプ」事業報告

- 1 趣旨 海辺での活動を中心とした自然体験や、異年齢集団による生活の中で協力し、課題を乗り越える経験を積む。その中で励まし合いながら成功体験を共有することで自己効力感を高めていく。これらの経験を通して、「生きる力」を育む。
- 2 期日 令和7年 8月16日(土)～19日(火)3泊4日
(学生サポーターは8月15日(金)～19日(火)4泊5日)
- 3 会場 大分県立香々地青少年の家 キャンプ場・宿泊棟
〒872-1202 豊後高田市香々地5151番地
TEL 0978-54-2096 FAX 0978-54-2152
- 4 参加者 県内の小学5年生から中学3年生までの児童・生徒21名
(小5:6名、小6:3名、中1:2名、中2:9名、中3:1名)

5 活動プログラム

	午前	午後	夜
8/15(金) 〈学生研修〉	オリエンテーション 活動プログラム確認	海の活動研修 竹の器づくり研修	ミーティング
8/16(土) 〈1日目〉	出合いの集い(自己紹介) アイスブレイク、班活動	薪割り、野外炊飯 夕日鑑賞	星空観察 1日の振り返り
8/17(日) 〈2日目〉	朝食作り(ホットサンド) 竹箸・竹の食器づくり	海の活動(いかだ・SUP)	キャンプファイヤー 1日の振り返り
8/18(月) 〈3日目〉	魚釣り	魚さばき体験 バーベキュー	花火 1日の振り返り・成果発表会準備
8/19(火) 〈4日目〉	思い出アイテム作り (ストーンアート)	成果発表会・別れの集い	

<1日目> 出会いのつどい・薪割り・野外炊飯・星空観察

☆活動の様子

- ・出会いのつどいでは、あいこじゃんけんや自己紹介ゲーム等のアイスブレイクを取り入れ、参加者は少しずつ緊張をほぐしていった。これから4日間共に過ごす仲間と気持ちを合わせる大切さを参加者は意識することができた。
- ・「失敗OK」、「みんなでチャレンジ」「プラスの言葉、応援」を合言葉にキャンプで目指す姿を全員で共有した。
- ・薪割り体験では、班で一人ずつ野外炊飯で使用する薪を割った。互いに声をかけ合いながら安全に実施することができた。
- ・野外炊飯では、カレーライスを班ごとに協力して作った。自分の役割を考えたり、笑顔でコミュニケーションを取ったりする様子が増えていった。
- ・「宇宙一厳しい鍋点検」を合格するまで、何度もチャレンジをする姿が見られた。合格した時は歓声が上がっていた。
- ・星空観察では、春と夏の星座を中心に観察することができた。望遠鏡で、二重星（ミザールとアルコル）を見ることができた。
- ・1日の振り返りを行い、成長したことや翌日のめあてなどを話し合うことができた。

☆指導のポイント

- ・参加者の緊張を軽減し、集団に馴染めるよう学生サポーターを中心に積極的な声かけや温かな雰囲気づくりを意識した。
- ・各活動前にミッションを提示し、協力してチャレンジできる場面を設定した。
- ・安全指導のために、全員が聴く姿勢ができてから活動前の説明を行うことを徹底した。



<2日目> 竹の食器づくり・海活動(いかだ・SUP)・キャンプファイヤー

☆活動の様子

- ・朝食はホットサンド。アルミホイルで包んだ食パンを牛乳パックに入れて着火。熱々のハムチーズ、バナナチョコパンの完成。
- ・竹の食器づくりでは、竹箸と竹の器を手作りした。竹箸の細さや長さ、竹の器の大きさ等、自分でこだわって細部まで作りこむ姿が見られた。
- ・昼食では、自分が作った竹の食器でそうめんを食べ、涼を求めた日本の文化を感じることができた。
- ・海活動では、班ごとに考えたかけ声を出しながら協力していかだを進めることができた。SUPは初めて体験する児童生徒も多かったが、立って乗ることにチャレンジし、海や空の広さを体感することができた。
- ・キャンプファイヤーでは、火を囲みながら、ゲームを通して、心の距離を縮めることができた。

☆指導のポイント

- ・2日目は、子ども達がより主体的に動けるように、学生サポーターは支援しすぎないことを確認した。
- ・「協力」とはどんなことなのか、小学生、中学生それぞれの立場から考える時間を設けることで、キャンプの目的が各活動と乖離しないように意識づけた。
- ・余裕を持った時間設定をすることで、じっくり活動に取り組むことができた。



<3日目> 魚釣り・魚さばき体験・バーベキュー

☆活動の様子

- ・ 5時30分起床。健康観察後、歩いて漁港まで向かった。
朝からゆったりと活動ができ、自然を感じる機会になっていた。魚は釣れなかったが、魚が餌を食べそうなシーンや大きな魚が泳いでいて、「釣れるかもしれない」というワクワクを体験することができた。
- ・ 魚さばき体験では、アジをさばいてフライにして食べた。魚をさばく大変さや、できたての美味しさを味わうことができた。
- ・ バーベキューでは、焼きそばやお好み焼きを協力して作って食べ、今日までの互いの頑張りを称えた。
夜は、花火をして親睦を深めた。



☆指導のポイント

- ・ 体調を整えて活動に望めるように、前日は早めに就寝をし、魚釣り後は長めの休憩時間を設けた。3日目ということで活動に余裕をもった時間設定をした。

<4日目> 思い出アイテムづくり・成果発表会・別れのつどい

活動の様子

- ・ 思い出アイテム作りでは、自分で拾った石を使用して思い思いのストーンアートを作ることができた。
- ・ 別れの集いでは、活動を振り返り、成長したことや学んだことを堂々と発表した。
- ・ 別れの集いでは学生サポーターへ色紙をプレゼントし、感謝を伝え合う場となった。

☆指導のポイント

- ・ 成果発表会では、話型をあらかじめ決めずに行うことで、子ども一人一人の思いや工夫が溢れる発表となった。



6 参加者の声

(子ども)

- ・協力することの大切さや美味しいごはんがいつも食べられること、気持ちのよい布団で寝れることは当たり前ではないことを改めて実感しました。
- ・一番ときめきを感じたのはいかだです。班の皆と力を合わせてサンキューのかけ声を言い、前進しました。
- ・活動を通して学んだことは、仲間とあきらめずに挑戦したら必ず良い結果が出るということです。
- ・仲間を大事にし、力を合わせて物事に取り組むことが大切だと感じました。
- ・このキャンプで心身ともに大成長できたと思います。この体験を生かしてこれからの日常生活でも自分ができることを増やしていきたいです。

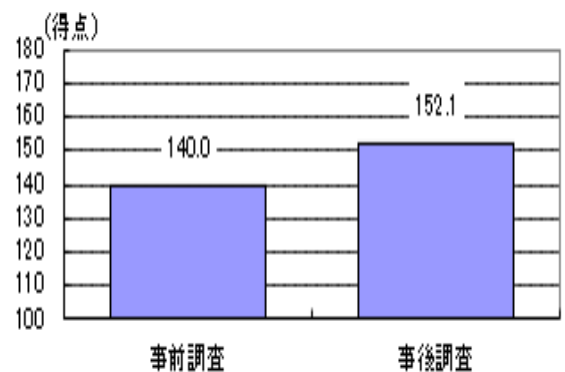
(学生サポーター)

- ・初対面の子どもたちを相手に、どうしたら成長させてあげられるのかを考えるよい機会となりました。
- ・初めてのことも多かったけど、同じ大学生サポーターや所員のみなさんのおかげで乗り越えられたし、班の皆も自ら動いてくれたり、助け合ったりしていてとても感動しました。

7 成果

- ・「失敗 OK」、「みんなでチャレンジ」「プラスの言葉応援」を合言葉に、力を合わせて課題を乗り越える活動を多く設定することで、協力して活動する姿が多く見られた。
- ・自己効力感を育むために、活動を行う上で励ましの言葉がけを意識させた。合言葉をいつも見える場所に掲示しておくことで、全員が4日間意識して活動することができた。1日の振り返りでは、一人の発表後に自然と拍手が起こり、参加者の笑顔も増えていった。
- ・参加者アンケート（IKR 評定）では、心理的社会的能力が5.7ポイント、徳育的能力が3.4ポイント、身体的能力が2.9ポイント、生きる力は12.1ポイント向上。
- ・所員の役割分担、大学生サポーターとの事前研修を行うことにより、意図を理解し、4日間見通しを持って落ち着いて活動するができた。

生きる力の変容



8 課題

- ・臨機応変に対応する場面もあったので、安全対応スキル（応急処置等も含む）など、所員と大学生サポーターの事前準備をより充実させる必要がある。
- ・各活動前に、所員と大学生サポーターで目的や視点を再確認する場を設定すると、より活動が充実したものになる。